をしています。言葉づかいは相変らず乱暴ですが、それだけに言うこともハッキリして、ぐずぐずしていません。
商売りを頼んでも、一言ですみます。あるなら黙って貸すし、金がなければ
「ない」
の一言です。サバサバしたものです。
松本たばはどことなく陰気で、平山恵坂はどことなく陽気でした。

敏夫の入学

明が強くて、キビキビと動き顔付けの平山恵子には、なやみも、悲しみも、およそ人生に甘ったれたところはないようにみえました。
――が、
それはそう見えただけでした。
(平山恵父の病気)
これがなやみのタネでした。
尼崎市とは東京川一つへだてた高宮市の、鳴尾というところに(恵父の女)がいるという噂は、松本恵の者なら誰でも知っていました。
その噂を、どこまで信じていいのか、私には判りませんが。一、その女性の顔も見たこともありません。――しかし。
「鳴尾に行ってくろ」
と、平気でぬけぬけと出かけて行く平山恵父の鼻の下を思いきりのばした顔を何度も見ました。
その度に見せる恵父の初恋な表情も忘れられません。
(平気な顔)
というよりは、も一つ強がって、フンと頑けるような、相手にしやがれと空うそぶいているような、そんな顔でそっぽをむいてしまうのです。
時には、
「エエ年さらして、情けたまされてきいや」
と、にくまれ口のようなこともいいます。
それだけにかえって、姐どのくやしさが、わきの者にはよく判るのです。
恵父が出て行ってしまったあとの姐どは、急に無口になり、台所で洗い物を片づけるしぐさも、心なしか荒っぽくなるようでした。
そして、
たぶん、それだからいよいよ一人息子の敏夫を、やたらと可愛がるのです。
(溺可愛がり)

と、世間でよくいうあれです。乳母チャンリンの見本とでも申しましょうか。
夫に愛想をつかした恵が子供に期待をかけるというのはよくあることです。
しかし、敏夫はそんなに出来のよい息子ではありませんでした。
飯場の若い衆の一人――たしか明田という男でした――が、飯場番頭の役を買って出ましたが、
「アレはあかん」
なのでした。
「何せ、勉強やら、学校やらがいいなんやから、しゃあない」
ということなのです。
宿題をやりかけた途中で、
「オッチャン、みんなやっといでや」
は、そだいい方で、
「オッチャン、キャッチボールせえへんか」
たどと、宿題そっちのけになるのです。
そのかわり、じめじめしたところのない、呑気というか、おおらかというか、明るくてゆったりした子でした。
鼻が低いのは母親似でしたが、父親に似て大柄で、腕力もかなりでした。

この息子を、姐どは、なめて、しゃぶるように可愛がります。
私が平山恵坂に入ってから、四、五年後のことと思いますが、こんな話もあります。
勉強嫌いの敏夫も中学をおえるときが近づいたのです。
勉強嫌いの息子でしたが、親ごころというものでしょうか、姐どは夫をぜひとも高校へ進学させたいと思いました。
「幸」家の秀才兄弟の陰に生まれた彼女は、夫の文盲をつねづね恥しく思っていたに相違ありません。
人一倍、気の強い姐どは、息子たけは兄たちに負けない秀才であって欲しかったのでしょう。――しかし、
願望と現実は、背中を向けあい勝ちなのがこの世の相場とでも申しましょうか。
本人はさっぱりその気がありません。
「オッチャン、オレ、高校やこ、行きたないねん。勉強嫌いやしな、試験受けても通らへんやろ」
別に悲しそうでもなく、むしろ朗らかに言えるくらい、さばさばした声でいいます。
まったく、敏夫が受験して、合格しそうな高校があるとは私にも思えませんでした。
「行きたないんやったら、行かなええやろ」

この子は高校なんかに行くより、親父のあとをついで土建屋になった方がいい、と思いました。

「しゃあけどなア、お母ちゃんにそない言うたら怒りよるしなア」

そして、その姐ごが、ある日、

「菅やん」

と気味の悪い猫なで声で呼びました。

いつもなら「菅っ」とか「日野っ」とか、荒々しい呼びすてなのです。

「敏夫の高校の願書もろてきてくれへんか」

モチロン、電車賃も日当も出すからというのです。

どうやら敏夫でも合格しそうな高校を見つけたらしいのです。大阪の○○高校です。

○○でなくて、今でもちゃんとその高校の名前をおぼえているのですが、やはり○○にしておきましょう。

「○○は金とり学校やモやから、敏夫かて入れるやろ。ナ、菅やん、どない思う」

「さア」

○○は私立ですが、さて金とり学校かどうか私は知りません。まして敏夫の学力で合格できるかどうかなんて、保証できません。

願書なんて本人にもらいに行かせりゃいいんだ、と一度は思いましたが、（まてよ）と考え直しました。

仕事を休んでいいというのがミ力です。願書をもらうだけの用事ぐらいすぐすみます。

「行きます、行きます」

姐ごの気が変らぬうちに、あわてて返事をしました。

すると姐ごがいうのです。

「へてからになア」

おやおや、まだ用事があるのかいな。

「その学校へ行ってからなア、何ボ、ゼニ出したら無試験で入れてくれるんか、聞いてこいや」

「アハハハ」

姐ごも冗談がきついナと思いました。いくら何でも、そんなこと聞けるわけありません。

願書をもらう窓口で、（ヤミ入学は何ボでんねん）なんて言えますか。

しかし、姐ごは真剣だったのです。

その夕方、願書の用紙をもらって――その用事は早くすんだから、たっぷり余った時間を、のんびり遊んでー叔母へ帰ってきた私は、「ご苦労さん、おおきに」と、ねぎらわれましたが、すぐ、

「ヤミ入学は何ボや言うてた？」

あたりはばからぬ姐ごの声に、目をパチクリさせねば

なりませんでした。

「何や、聞いてこんかったんか」

「そんなこと、どこで聞いたらいいか判らないし……」

姐ごの権幕に圧倒されてシドロモドロの私に、バリザンボウが石つぶてのように飛んできました。

「アホ、スカタン。大阪くんだりまで何しに行きさらしたんや。ボケ。今ごろ、願書出しに行くときは、しっかり聞いてきいや。聞いてこなんだら承知せんぞ」

（何と無茶苦茶をいう女だろう。自分が何を言っているのか判ってるんだろうか？）

というのが、そのときの私の感想でした。

たぶん、息子可愛さのあまり、道理もへったくれもなくなっていたのでしょう。

（恋は盲目）

という言葉がありますが、我が子に対する母親も、しばしばそれに近い状態になるようです。

願書を出しに行ったときも、前回同様、何も聞かずに帰ってきましたから、前にもまして叱られました。で、恐る恐る、

「しかしなあ姐さん。そんな無理をしたら、入学してから苦労するのは敏夫自身だぜ」

と言ってみました。

「判ってるわい、そのくらい」

判ってはいても、何とか高校に入れてやりたいという気持ちには変りはないようでした。

結局、それでどうなったかというと、敏夫は○○高校へは入学できず、同じ大阪の××高校に入りましたが、一年もたたないうちに退学してしまいました。

そして、松本組でブルドーザーの運転手になりました。

勉強ぎらいの彼としては、その方がよほど良かったようです。

敏夫の高校入学に、いくら金を使ってもいいと姐ごは言いました。

事実はそんな金は使わずにすんだのですけど、それにしても、そんなことを口に出す以上、相当なたくわえがあるに違いないと思いました。

ところが、そうではなかったのです。

ずっと後になってそれがわかりました。

それは、敏夫の高校入学より更に、二、三年後のことです。

平山叔母が尼ケ崎から川西へ移転することになりました。

と、突然、話が変っては読者も面くらうことでしょう。

原を追って説明します。

松本組が飯野建設から独立したのです。

もともと、松本親父はヤブノの先代に可愛がられて、のし上って来た人です。

そのヤブノの先代という人は、私が平山鈑場に入る以前に亡くなって、その頃は二代目の時代になってました。「若」――と呼ばれていた二代目は、どこかの大学を出て、銀行か何かにつとめていた人でしたが、先代が亡くなった後、家業をつぐことになったのです。

サラリーマンか、学校教師が似合いそうな穏和なインテリ型の人で、土建屋らしい荒々しいさは少しもない人でした。

「若」自身も、自分がこの稼業に似つかわしくない人間だと百も承知の様子でした。

どういう事情か、先代の頃、その片腕だったやり手の番頭が社長になり、「若」には専務という肩書きがついていました。

この新社長と新専務はウマがあわないのだという噂を、ちらりと耳にはさんだことがあります。

性格その他、正反対な二人を見ていると、この噂はホントらしく聞えました。

しかし、それ以上にウマがあわなかったのは、新専務の「若」と松本親父だったような気がしてなりません。

いつだったか、何の話のときだったか、

「土方が、金のことを言うな」

と松本親父が言ったのをおぼえています。

もちろんそれは土方の気っ風のいさぎよさを言ったのであって、タダで働けといったのではありません。しかし、タダで働けといっているように誤解される言い方でもあるのは当然です。

松本親父にはそういう古い職人肌なところがありました。それと、一見インテリ風の専務と、ウマが合わなかったと想像しても、不自然ではないようです。

それに先代存命のころとくらべると、ヤブノはともかく、松本組は次第に経営不振になっていたようです。

そこにはいろいろ原因もあったでしょうけれど、私などにくわしいことは判りません。しかし、かっては年に一回、組の者を連れて旅行に出かける景気だったのが、やがて給料の支払いがおくれたりするようになったのですから、経営不振は事実です。

松本親父としては、やり切れなかったでしょうし、何とかここらで背伸びがしたくなったのではないでしょうか。

それからまた、こんなこともあります。

前にも書きましたが、以前は出雲駅近くの向島というところに、柄谷工務店系の各職方の鈑場が集まって、鈑場銀座といわれてましたが、土地の持主である旭硝子がそこに倉庫をつくることになり、各鈑場は離散してしまいました。

その結果、松本組は向島から徒歩で一〇分ほど南の道意町に移されました。

ところが、今度は向島の倉庫を撤去して、そこにシボレックス工場が建つことになり、向島の倉庫に通意町に移転することもありました。そこでまたしても松本組は追い立てられることになりました。

さいわい、松本組の中でも平山鈑場だけが同じ道意町でも少し離れた所にあって、これは旭硝子の土地ではなく、敷地も百坪余りあったので、ここを改築することで決着しましたが――

それにしても、上の方の都合で、次々と追い立てられるのは、松本親父には不快だったのではないでしょうか。

それやこれやがかさなって、親方は独立を決心したようです。

上がなければ、もうけも途中で目べりはしないですむ、と思ったようです。

ついでに今までの建築土木から、純土木に変身することになりました。

「建築の方がたしかに　手がたいけれど、純土木は損する時も大きいが、もうかる時も大きい。」

と松本親方は大変な意気ごみでした。

ちょうどその頃、東京から関西へ進出してきた「国土開発」という会社が、下請をさがしていました。

渡りに船だったのです。

松本は国土の下請となり、川西市の多田というところ[illegible]事になりました。

今までなら、歩いて通える[illegible]三[illegible]ったが、今度はそうもいきません。

清和源氏で有名な多田というところに、[illegible]〇反[illegible]を建てることになりました。

といっても、松本の本拠地はあくまでも尼ケ崎の道意ですから、親方自身は動けません。

そこで、多田の責任者は平山親父ということになりました。

松本親父の義兄の本田親父はけがで入院中だったのです。

万博より二、三年前のことです。

その頃、このクラスの土建業者では珍しかったブルや、ユンボを何台も買いこんで松本親方は大張り切りでした。

これで今までの赤字をとり返して、一気に大きくなってやろう、そんな野心があったのだと思います。

そのためには、少しでも経費を切りつめ、今までの倍も能率よく働いて、とも思ったでしょう。

が、平山親父の方は組のことより、自分の待遇や、飯場のことが気になりました。

多田の飯場にフロ場をつくれ、尼崎を離れるのだから出張手当をよこせ、という要求を出しました。

今から組を立て直そうとしている時に、平山のやつ何を言い出すんだと、松本はにがい顔をしました。

結局、風呂場は立てましたが、出張手当はナシということになりました。

しかし、ある程度の支度金と飯場経費が松本から平山に出たようです。

それで平山は一息つく事が出来ました。

そのとき姐ごが言ったのです。

「昔は若い衆一人に百円の割で、毎月飯場経費が出ていた」

昔というのは、飯場親分の向島時代のことです。一人百円の経費ですから、一人でも多く若い衆を入れれば、平山の収入はふえるわけです。

それが頭数町へ来てからなくなって、飯場が苦しくなったというのです。

毎月、飯代が赤字になるので、苦しまぎれにドブロクを作ったりしたのだと姐ごは言いました。

「そうでもしなけりゃ、やれんかったんよ」

というのを聞いて、ハッと思い当ることがありました。

姐ごが手洗いの方が汚れがよく落ちる、洗濯機なんて息けの機械や、と言ったのは、ただの強がりではなくて、生活が苦しくてそこまで金が廻らなかったからだーと。

だとすると、敏夫の高校入学に、いくら金をつんでもいい、と言っていたその金はどうなるのでしょう。そんな金があったとはとても思えません。

そんな矛盾の中にも、平山姐ごの母ごころというものを、事の是非善悪は別にして、考えてしまうのです。

後記

〝渡せ〟三一号の発行が去年の八月、本号の発行予定が裏表紙に印刷してあるように去年の十二月、そして、今は八十年の六月。十ヶ月ぶりの〝渡せ〟発行、読者の皆様、おひさしぶりです。この十ヶ月の間、見捨てることなく、〝渡せ〟どうなってんの〟と道で声をかけてくれた人達、どうもありがとう。そして、今、読んでくれているアナタ、ありがとう。切手を貼らなくてはならなくなったハガキですが、多くの人の声を心待ちしています。よろしく。

☆　☆　☆

二の十ヶ月の間に、アンニュラは一児の父になりました。子供の名前は、和多里（ワタリ）、男の子です。

ヤジ馬は、半年ほど賀建設の下請け、阿倍野建設に直行でいったあと、体にせや自信を持って、現在は鉄筋ヤの見習いとして銭を稼いでいます。

アシュラとヤジ馬は、子供を作っただけではなくて、奈良に少しばかり畑を借りて、野菜も作っています。タカナ、エンドウ、ジャガイモ、玉ネギ、大根、キューリ、などなど。素人の日曜だけの農作業、だけども、不思議なことに、食べれるものが穫れます。

子供を作ったり、野菜を作ったりしていたせいで〝渡せ〟を作るのが遅れた、ということでは決してないのですが、どうも〝後記〟にこんなことを書くと、なにやら言訳めいてしまうようです。年内に、もう一度発行したいと思ってます。では、また……（や）

一九八〇年六月一〇日発行・第三二号
労務者渡世編集委員会
大阪市西成区萩之茶屋三ー六ー三五
「御姫屋」気付